

訂改
高等女學讀本
卷四

3759
Sa20
資料室

42138

教科書文庫

4
810
42-1916
200030
1962

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

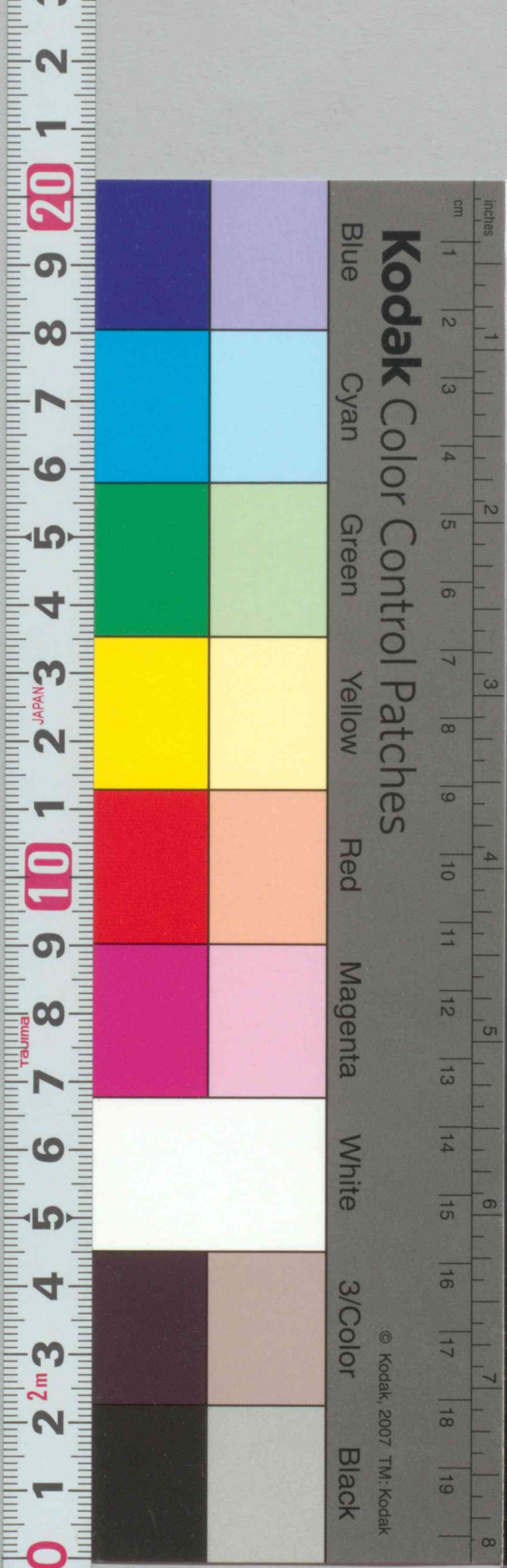
C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

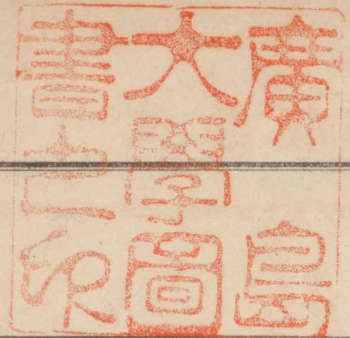
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Sa20

資料室
日二十二月一年五正大
濟定檢省部文
用科語國校學女等高



佐藤 球
鹽井 正男
共編

訂改高等女學讀本

東京 株式會社 明治書院

訂改高等女學讀本卷四目次

一、	大海の日出	一
二、	雲	五
三、	武藏野 (口語文)	九
四、	江戸のなりたち	一三
五、	名將の文事	一七
六、	日本國民と自然美 (口語文)	二一
七、	河村瑞軒	二六
八、	入船出船 (韻文)	三一

目次

輕度 恥辱 懇意 竟趣

九、	織物の進歩	三二
一〇、	トマス・エジソン	三七
一一、	石炭	四四
一二、	支那人の長所	五〇
一三、	天野屋利兵衛	五四
一四、	母に上るその一(書簡文)	五九
一五、	母に上るその二(書簡文)	六六
一六、	格言	七一
一七、	書籍の用	七二
一八、	祕藏の瓶子	七六
一九、	今様二首(韻文)	八〇

二〇、	伊勢神宮	八一
二一、	カミとマゴコロ(口語文)	八六
二二、	鏡	九一
二三、	水兵とその母	九四
二四、	雪(口語文)	一〇一
二五、	雪の歌(韻文)	一〇五
二六、	茶僧利休	一〇六
二七、	油斷大敵	一一一
二八、	運命その一	一一六
二九、	運命その二	一二三
三〇、	酸からず甘からず(韻文)	一二九

三一、 歐米人の公共道德（口語文）……………一三一

三二、 訪問及音信……………一三七

三三、 書簡文の心得……………一四三

三四、 通信の今昔……………一五〇

卷四目次終

改訂高等女學讀本卷四

一、 大海の日出

枕を撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。
 時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の
 水明樓にして、樓下は直に太平洋なり。

午前四時過にもやあらん、海上なほほの闇く、波の
 音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うて燻りた
 る樺色の横たはれるあり。上りては濃き藍色の空と

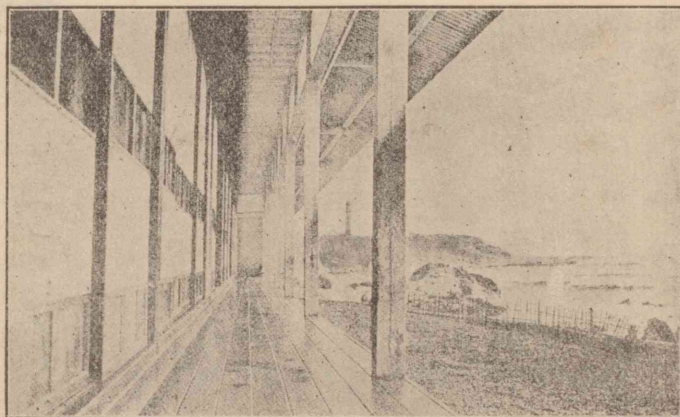
銚子
下總國海上郡
 にありて、利
 根川の川口に
 臨む。

そ^〇うて
 （沿ひて）



掛一掛

犬吠岬
銚子の東南約
一里、太平洋
に突出せる岬
角なり。



水明樓と犬吠岬

なり、ここに一痕の弦月ありて、黄金の弓を挂く。光さ
やかにして、さながら東海を
鎮するに似たり。左手に黒く
さし出でたるは犬吠岬なり。
岬端の燈臺には廻轉燈あり。
陸より海にかけて、連りに白
光の環を畫く。

暫くする程に、曉風冷冷と
して青黒き海原を掃ひ來り、
夜の衣は東より次第に剝げ

くろくして
(黒くして)

て、蒼白き曉の波を踏みて、此方へ此方へと近寄る状
も指點す可く、磯の黒きに濤白くうちかかるさまも、
漸く明になり來りぬ。眼を上ぐれば、黄金の弓と見し
月も、何時しか白銀の弓とかはり、燻りて見えし東の
空も、次第に澄みたる黄色を帯びぬ。森森たる海原に
立つ波の、腹は黒くして、背は蒼白く、夜の夢はなほ海
の上になまよへど、東の空已に睫を開きて、太平洋の
夜は今明けなんとす。

已にして、曙光は花の發くが如く、圈波の廣まるが
如く、空に水に廣がり行きて、水いよいよ白く、東の空

ますます黄ばみ、弦月も燈臺もわれと薄れ行きて、果
はありとも見えなくなりぬ。この時、日の使とも覺しき
渡り鳥の一行、鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大
洋の波と云ふ波は、盡く爪立ちて、東の方を顧みつつ
さざめく。

五分過ぎ、十分過ぎぬ。東の空、見る見る金色射し來
り、忽然として猩紅の一點、海端に浮み出でぬ。すは、日
出でぬと思ふ間もなく、息をもつかせず、海神が手も
て撃ぐるままに、水を出づる紅點は金線となり、黄金
の櫛となり、金蹄となり、一搖して名残なく水を離れ

斛石

つ。水を離るるその時遅く、萬斛の黄金たらたらと昇
る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く
大洋を走ると思へば、眼下の磯に、忽焉として二丈ば
かり黄金の雪を飛ばしぬ。（徳富健次郎―自然と人生）

二、雲

一、

雨後の雲の美しさは、高山に在りてこそ見るべけ
れ。低き山に居たらんには、なほ甲斐なかるべし。名あ
る山山をも、眼の前脚の下に見る程の山に在りて、夏

谿一溪

の日の夕など、風少しある時、谿に臨みて附近の雲の往來を觀る、いと興あり。前山の翠の色一入増して、麓の方の風情も見どころ多く、一郭なせる山村の寺など、それかとも見ゆるに、濃く白き雲の脚疾く、風に乗りて空を翔るが、己が形をも、かつ龍の如く、かつ虎の如く、翻りたる布の如く、開きたる傘の如く、さまざまに變へつつ、山を蝕み、麓を被ひ、山村を呑みつ吐きつして、前なるは這ふやうに去るかと思れば、後なるは飛ぶが如く來りなんとする狀、觀て飽くといふことを覺えず。小山の峰通りに立てる松の並木の、遠見に

は馬の鬣のやうなるが、現れつ隠れつし、金字形したる山の嶺の、心あてに見しあたりならぬ處に、突として面を出す、殊に面白し。

二、

雲のするわざも多きが中に、いと面白きは、冬の日朝早く、平かに互れる雲の、谷を籠め麓を被ひて、世の何物をも山の上の人には見せぬことなり。日輪未だ出でたまはず、月落ち、星の光薄れながら、天なほ一しきり暗き頃、山高き所に宿りたる身の、萬づの物珍しさに、例になく夙く起き出でて、戸なども自ら繰り、

絲糸

むかう
(向ひ)

心締むるやうなる寒さを忍びて、眼を放つて見渡せば、昨日は脚の下に、麓路の村も畫の如く小さく見え、川の流の白きが絲ほどに細くそれと知られ、深き谿を隔てて、彼此と名ある山山の數多く連なり立ちたるが眼に入りしに、今は我が立てる處を去る幾許もあらぬ下より、遙に向うの方、際涯知らぬあたりまで、平かにして大江の水の如くなる白雲たな引き渡り、村も隠し、川も隠し、山山谿谿も隠し果てて、下界を海の底に沈め盡せるがごとくに見せたる、雲のわざとは知りながら、さすがに馴れぬ眼には驚かるるもの

なり。(幸田成行)

三、武藏野

昔の武藏野は目も遙遙とはてしもない萱原であつたやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。その木は重に檜の類で、冬は悉く落葉し、春はまた若葉が萌え出る。これらの變化が、秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、時に、雪に、新緑に、紅葉に、様様の光景を呈する。其の變

化の妙は、一寸、西國地方や、東北國の者には解りかねるのである。

檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く、木枯が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木が葉が高く大空に舞つて、小鳥の群のやうに遠く飛び去る。木の葉が落ち盡せば、十數里に跨る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄み渡る。遠い物音が鮮に聞える。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の

さへづる
(囀)

まつて
(舞ひて)

蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車荷車の、林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。駒の蹄で落葉を蹴散らす音。これは騎兵演習の斥候か、さなくば、夫婦づれで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかり行く。ひとり寂しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣のエ林でだしぬけに起る銃の音。

ことに時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。山家の時雨は、我が國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い廣い野末から野末へと、林を越え、杜

を越え、田を横ぎり、又畑をめぐり、忍びやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽で、また鷹揚な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又、人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深い。其の代り、武藏野の時雨の更に人なつかしく私語くやうな趣はなかつた。

武藏野の冬の夜更けて星をも吹き落しさうな木枯が、すさまじく林を渡る音は、またいひ知らぬ寂しみを感ずる。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は此

の物凄風風の音の、忽ち近く忽ち遠く響くを聞いては、遠い昔からの武藏野の光景を思ひ續けたこともしばしばある。(國木田哲夫「武藏野」)

四、江戸のなりたち

江戸は今こそ東京といへ、昔は、月影の「草より出でて草にこそ入れ」と歌へるばかり、廣く遙けき武藏野の末にして、町はかぎりもなく廣き野原に續き、東の入海は、廻りて遠く陸の間に入りこみしを、長き年月経る間には、野も片端より開かれて田畑となり、海も

草より出でて
古跡、武藏野
は月の入るべ
き山もなし草
より出でて草
にこそ入れ。

畑一畠

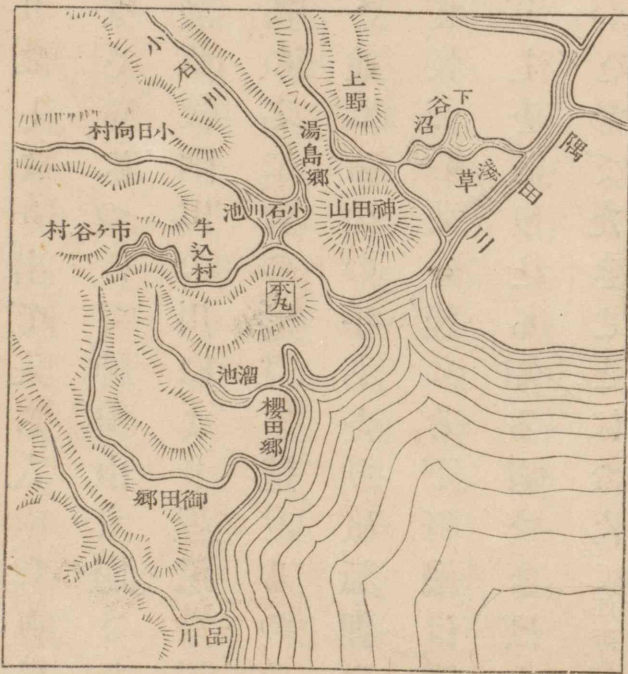
川水におし流されたる沙に埋められて、浅き處は洲と變り、洲は又陸に續きつつ、幾度そのさまかはりつらんも測られず。

康正三年
後花園天皇の
時。

江戸の城は、康正三年に、上杉定正の家老なりし太田持資入道道灌の築けるなり。道灌のこの城つくりし頃は、城の間近くまで、船漕ぎ寄すべかりきとぞ。天正十八年、徳川家康公この地の便よきことを見定め、移り居られしより、賑はしき都とはなれり。されど、この頃の事をしるせる書によれば、城より東は葭の茂れる潮入にして、諸士の第に割り渡すべき地は、十

天正十八年
後陽成天皇の
時。

町に足らず、かくては、大名の城下にはなるまじ」とい



家康開府當時の江戸圖

ひつる者さへありしよし見えたれば、その開けざりしさま推し測られぬべし。

家康公は、道灌の築きし城を本丸とし、四方の石

垣も濠も修めかへられて、大城となし整へられき。さ

濠一壕

棲一栖

て、四方の海の波穩に、吹く風も枝を鳴さぬ御代となり
りにしより、出で入る人も、移り住む人も、年ごとに數
まさるにつけて、神田山も崩され、下谷沼も埋められ、
淺草は隅田の川口より程遠き川上となりて、今は海
苔の名に、古の形見を遺せるのみ。されば、今、貴族の軒
を並ぶる山の手あたりは、狐狸の隠れし叢の跡にし
て、豪商の叢を連ぬる下町邊は、鯉・鮒の棲みたる淵な
りしを、さりとも知る者なきばかりうち開けたるは、
いとめでたきことになん。(佐野常民)

五、名將の文事

上杉定正
鎌倉管領 扇
谷家。道灌の
主。
廳南
上總國長生
郡。

太田道灌、或時その主上杉定正に従ひて、上總の廳
南に軍を出す時、敵、海邊の山上に石弓を仕掛けたり。
折ふし夜の事なりけるが、潮干なば、干潟を押し通し
なん。潮湛ひたらば通りがたかるべし。いかにと人人
僉議しけるに、道灌、いぎ、見て來んとて、馬を乗り出し
けり。程なく歸り來て、潮は干たりとて、軍を押し通し
けり。こは、

遠くなり、近くなるみの濱千鳥、

なく音に、潮の満干をぞ知る。

歌
遠くなり
の
古歌、作者未
詳。

抄

とよめる古歌を思ひいだして、千鳥の聲遠く聞えた
れば、潮の干たるを知れりとなり。又、引きて歸る時、利
根川を渡らんとするに、これも夜半にて、暗さは暗し、
諸軍渡しかねて、いづこか淺瀬なるべきとののしり
あふに、道灌、また、古歌に、

そこひなき淵やはさわぐ。山川の

淺き瀬にこそ、あだ波は立て。

とよめり。波音の荒き處を渡せ」と下知して、難なく軍
勢を渡しけり。

寛正五年、京師に朝して、時の將軍足利義政に見え

そこひなき
の歌
素性法師の
作。古今集に
出づ。

道灌の像



太田道灌肖像

し時、後土御門天皇敕し給ひて、「武藏野はいかに」と問
はせ給ひしに、道灌、や
がて、

露おかぬ方も

ありけり、夕立の

空より廣き

武藏野の原

と答へまつり、「隅田川

の都鳥はいかに」と仰せたまひしに、
年ふれど、わがまだ知らぬ都鳥

すみだ川原に宿はあれども。

「さらば、なべての景色は」とありしに、

わが庵は、松原つづき、海ちかく、

富士の高嶺を軒端にぞ見る。

叡容

と、いづれも歌にて即答しまつりしかば、叡感斜ならず、忝くも、

武藏野は、刈萱のみと思ひしに、

かかる言葉の花も咲きけり。

と、御製さへ賜ひて、賞讃せさせ給ひけり。

ただに武威を八州の野に振ひしのみならず、文藝

も亦かく九重の雲の上にまで達して、その面目を施ししは、眞に文武兼備の名將とこそいふべけれ。

六、日本國民と自然美

我が日本國は、氣候は溫和である。山川は秀麗である。花・紅葉、四季をりをりの風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が、現生活に執著するのは自然である。四圍の風光、吾等の前に横たはつてゐるものは、すべて笑つて居る中に、住民がひとり笑はずには居られぬ。現世を愛し、人生生活を樂しむ國民が、天地山川を

わらつて
(笑ひて)

愛し、自然にあこがれるのも當然である。この點において、吾吾は、實に天の福德を得て居るといつてよろしい。

我が日本人が花鳥風月に親しむことは、吾人の生活、いづれの方面においても見られる。上代における衣食住は、多くはわが國土に繁茂して居る植物界から材料を取つたことは、いふまでもない。中世の女の装束には、柳がさね、梅がさね、山吹がさね等、四季折折の花に因んだのがある。又、染色にも櫻色、桃色、藤色、栗色、葡萄色など、植物界から取つた名が多い。近代の日

（えびいろ
葡萄色）

たつた
うら
たつた
たつた
うら
（言はん）

本の娘の著物の模様のはでやかなのは、西洋人の著書にも、いつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、一層それよりも綺麗である。それがやがて衣服にも染め出されるのは自然である。やさしい女流の装束は當然ともいはうが、昔の武士の戦争に出て立つ甲冑にも、小櫻威、卯花威など、いかにも優美ではでやかなではないか。

それから、食物の方面でも、お萩、牡丹餅など、その名は勿論、其の形も、花や木に象つたのが多い。その他、庭園の構造でも、室内の裝飾でも、家屋の建築でも、切石

や煉瓦は用ひないで、すべて野づらの石や植物そのまゝを用ひ、自然の趣味を存して居る。

花を活けるにも、これを畫くにも、その生きたままに、自然に任せてするのが美しい點である。枝をむしり取つて花ばかり花瓶に挿すのは、西洋の風であるが、自然の幹枝をそのままに、活花でも、盆栽でも、天地の配合よろしくあらはすのが、日本人の長所である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。

また、昔から、かりそめの遊戯でも、花合・菊合といつ

うつくしい。
(美しき)

あはれ

たやうなあそびで、文學の方面でも、四季の風光は、一日も我が國民の頭から離れたことは無い。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、即ちあはれを知るのである。源義家や源頼政や平忠度等が、いかに日本武士として、優にやさしく感ぜられるかといふことは、このあはれを知つたといふことがあるからである。

英雄豪傑ばかりではない。日本人ほど、國民全體にあはれを知つた、即ち詩人的なものは、恐らく世界中にあるまい。歌心は誰でもある。歌は作らぬまでも、俳

句を作る。上手でこそなけれ、何人もつくつて、花見遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、詩人的國民は、誠に遊事に忙しいのである。芳賀矢一——國民性十論による

七、河村瑞軒

河村瑞軒は機智に富めりし人なり。はじめ江戸にありて車力を業とせしが、貧窮甚だしかりしかば、上方に往きて身を立てんと思ひ、家財を金にかへて出で立ちぬ。さて、小田原まで行きて、一客舎に宿りしに、

隣室に一老人の宿れるがありて、日本第一の江戸を捨てて、上方へ行きたりとて、何の益かあるべきといひしかば、その言に感じて、再び江戸に歸り來ぬ。やがて、品川に到りしほどに、折しも、孟蘭盆の節にて、瓜・茄子などの流されたるが、夥しく海濱に漂ひ寄れるを見、これを拾ひて持ち歸り、鹽漬にして市中の普請場に賣りあるき、大いなる利を得たり。それにたづきを得て、幾ばくもあらぬに、日傭頭となれり。

たまたま市中に大火ありて、延焼數里に及び、瑞軒の家も焼け失せぬ。瑞軒おもへらく、機逸すべからず

木曾
信濃國西筑摩郡、木曾川河孟の山谷の總名にて、古より良材に富む。

あらそうて
(争ひて)

と、僅の金を懐にして、急に旅装を整へ、木曾へと志しぬ。さて行きつきて、その山里なる、ある材木商の門に立ち、遊び居たる小兒に、こよりに貫ける小判を與へて、豪奢のさまを装ひ、その主人に會ひて、自ら江戸の豪商と稱し、許多の材木を買ひ入るる約を結び、木ごとに極印を押さしめぬ。

二日ばかりありて、江戸の商人等、先を争うて木曾へかけつけしが、すべて極印ある材木のみにて、いかにもすること能はず。ここに、商人等は、やむなく瑞軒にたのみて、高價にてこれを競ひ買ひしかば、瑞軒

は一擧して數千兩の利を得たり。すなはち江戸に歸りて、廣大なる家を營み、普請受負を業として、ますます富裕を致せり。

瑞軒、學を好み、多くの書を集め、また、數多の學生を養へり。かの新井白石の如きも、亦その知遇を得たる一人なりき。ことに地理の學に精しかりき。當時運漕の業いまだ全國にあまねからず、奥羽地方との海上の連絡は全く開けざりき。瑞軒、幕府の命に應じ、まづ仔細に舟泊の位置を視察し、ついで、堅牢なる商船を雇ひ入れ、また、漕務所を諸國の要地に置き、東海は陸

荒濱 陸前國宮城郡
 下田 伊豆國賀茂郡
 酒田 羽後國飽海郡
 下の關 長門國豐浦郡
 赤間が關の別稱

奥の荒濱より伊豆の下田に至るまで、北海は出羽の酒田より長門の下の關に至るまで、その航路を開きぬ。公私の運漕、これが爲にその便益を受けたること、實に少少にあらざりき。

元祿元年には、また、大阪治水の命を受けたり。瑞軒、親しく實地の形勢を踏査して、一條の新河を九條島に通じ、その泥沙を以て一丘を河口に築き、許多の松をそこに植ゑて、航路の目標となせり。工事に日を費ししこと僅に二十餘日、世その神速なるに驚けり。かの瑞軒山と呼び、安治川といふもの、皆その功を傳へ

ん爲の稱なり。安治は瑞軒が晩年の名なり。(本朝傳記)

八、入船出船(中學唱歌)

錨のつなの たえまなく、

はしけ端艇の 往き反り

波止場に響く こあげ歌、

日に日に賑ふ みなと口。

ああ、聞きて知れ、 國の富、

いり船出船の 楫の音、

帆ばしら、瀬戸に 林をなし、

舟

かんどり
(舵取)

水夫かこに舵手かんどり 馳せちがひ、
あげ場は人の 浪よせて、

日に日に榮ゆる みなと口。

ああ、見ても知れ、 國の富、

いり船出船の 眞帆の影。

九、織物の進歩

維新後、西洋風俗の輸入は、上中下を通じて一種の流行となり、服制上に一大變革を及し、つひに洋服流行の趨勢を來し、舊來、上下熨斗目紋付地に用ひし晒

かうもり
(蝙蝠)

布の類は、頓に世の需要を失ひて、今は全くその跡を絶つに至りぬ。而して、洋服の流行は、これに附屬する品類の必要を生じ、肩掛襟卷蝙蝠傘、手巾の類より、室内に用ふるテーブル掛窓掛敷物の類に至るまで、我が機業社會に向ひて、其の供給を促し來れり。

これと同時に、洋式織機輸入の必要起り、かのジャカード・バッタンのごとき新織機を用ふることとなりしが、明治二十一年頃より、西陣を始めて、桐生、足利においては、専らこの新織機を用ひて輸出品を製造するに至りぬ。殊に、京都府が時勢の變遷を早くも

ともなうて
(伴ひて)

看破して、西陣の織工を佛國リオンに遣し、ジャカー
ド・バッタンの新織機を輸入したるが如きは、其の功
偉大なりとす。又、西陣につぎて、機業上の改良に注意
し、海外の需要に伴うて、精巧なる新意匠のものを織
り出したるは、桐生・足利なりとす。また、八王子の機業
も、維新後大いに進歩し、内地用の絹織物にては、屈指
の機業地となれり。又、維新前まで紋付地に用ひられ
し京都名産の羽二重も、ハンカチーフ其の他西洋婦
人の衣服地として、明治十七年、初めて北米合衆國・佛
蘭西・英吉利等へ輸出せしより、その産額年年數千萬

圓に達し、福井縣の如きは、羽二重の機業地として、そ
の名大いに顯るるに至れり。

我が邦の織物中、ことに木綿織物に著しき影響を
及したるは、洋絲の輸入にして、從來、わが邦の綿絲は
婦女の手紡に係るものなりしがゆゑに、同じ人の手
によりて作られたる品も、つねに精粗不同を免れず。
然るに、洋絲は其の太さ均一にして、これを區別する
にも番號を以てするゆゑ、何番の絲と稱すれば、いつ
れの國の絲そればかりかにても、其の太さにおいては毫も異なる
ことなし。しかのみならず、織工の勞力を減ずる便益

織—織

あり。殊に、かの瓦斯焼絲の如き織巧の綿絲輸入せられてより、爲に我が邦の織物は、俄然舊觀を一變し、更に從來なかりし所の織物を現出し、且つ大いにその産額を増加したり。即ち、愛知・岐阜の木綿縞、埼玉の二子織、紀州の綿フランネルの如き是なり。また足利の絹綿交織、丹後・桐生の觀光縮緬の如きもの織り出されて、その絹帛に及せる影響も少なからず。其の原因たる、皆洋絲の輸入に由るにあらざるはなし。ここにおいて、從來もてはやされし紋羽・眞岡木綿の類は、殆どその地位を失ふこととなれり。またこれ時勢の一

變遷か。

(横井時冬—日本工業史による)

一〇、トマス・エジソン

エジソンは近代の有名なる發明者の一人なり。彼は西曆一千八百四十七年を以て、北米合衆國のオハイオ州に生まれたり。父はもと和蘭人なるが、早くよりここに來りて、裁縫・園藝等の職を營み、また、穀商をも營めり。性質まことに温厚にして、また、頗る意志の強き人なりしが、如何せん、家道つねに意のごとくならずして、はかなき生活をのみ送り居たり。されば、エ

一千八百四十七年
我が仁孝天皇の弘化四年。

温—温

協一叶

ジソンは學校に入學することも協はず、ただわづかに母に従ひて、讀書算術の初歩を學び得たるのみなりき。されど、性甚だ讀書を好みて、書物といはず、新聞といはず、手もとにあるものは、すべて根氣よくこれを讀み習ひしかば、その知識は次第に博くなりぬ。

家道ますます衰へて、今はその日の生活にすら事缺くやうになりければ、彼はみづから世に出でて、生活の道を求めざるべからざるに至りぬ。これ彼のわづかに十二歳に達せし時なりき。體格の強壯なるのみならず、意志もまた父の性をうけて、頗る強固なる

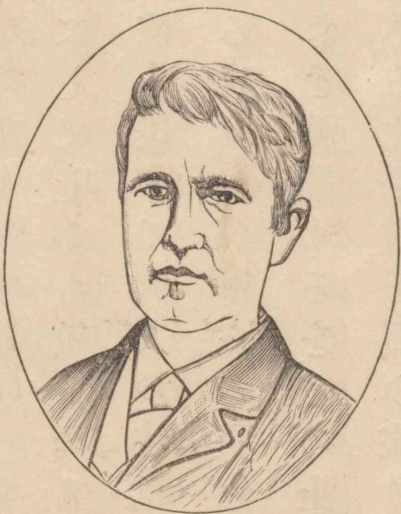
この少年は、今や憤然としてみづからその力を試みんと決心せり。

捷一捷

彼はある鐵道のボーイとなりぬ。その事務に忠實にして、しかも敏捷なるはやくも他の熟練したる同僚を凌ぎて、人人の注意を惹くに至れり。かくて、暇ある時は、わが得たる賃銀をば書物に換へて、熱心にこれを讀誦するを、この上もなき樂とせり。ある時、彼はある化學書を買ひ來り、常の如く熱心にこれを讀めり。されど、その學理は容易に解せらるべくもあらず。ここに、彼は書中の注意に従ひて、みづから實驗に訴

へんと、さまざまの困難を冒して、あやしげなる實驗室をば、その車中のわが室内に設けたり。かくて、汽車の進行中はそこに引き籠りて、その實驗を続けぬ。後年、彼が發明の偉業を大成せし素は、實にこの間に養はれたるものなりといふ。

企圖の才を有し、かつ、萬能の知識を具へたる彼は、また、一つの新計畫をなしぬ。そは、古き活字と印刷器械とを買ひ來りて、短日月



像 育 ソ ジ エ

併
併

の間に、一新聞を發行したることなり。彼は一人にて、記者と印刷者とを兼ね、併せてその販賣者たりしなり。かくて、その新聞をば、汽車の乗客に賣り、その收入を以て、實驗室の整頓を圖れり。されど、不幸の出來事起りて、彼の苦心は空しく水泡に歸せり。ある日、燐の入りたる壇、ふと棚より落ちて發火し、その近くにありたる荷物に燃え移りぬ。すは、火事よ」とたち騒ぎしほどに、人人馳せ來りて、とかくして揉み消しつれば、大事に至らずして止み、たれど、これがために、多年の苦心になれる彼の實驗室は、全くうち壞されて、その

跡を留めざるに至れり。

その後、また、新聞の記事に由りて、ある商人の怒を買ひ、ために、その新聞も遂に廢刊するに至れり。かくの如く、さまざまの不幸は、一時に彼の身邊に集まり來りて、彼の志業も、一時中絶せんとしたりしが、彼はこれがために少しも撓むことなく、熱心にその業務を勉勵し、その餘暇を以て、ひたすら思を研究に凝らしたり。

鐵—鍊

ある日のことなりき。エジソンは鐵道の線路の傍に立ち居たるに、その前面に、一人の幼童ありて、線路

からうじて
(辛くして)

に上りて、戯れ居るを見たり。危険なりと思ふまもあ
らせず、かなたよりは、はや列車の進み來れるありて、
その間、僅に數間に過ぎざりけり。かくと見るや、エジ
ソンは、奮然身を躍らして線路のうちに入り、いそぎ
幼童を抱き上げたり。げにあやふかりき。列車はエジ
ソンの肩を摩りて過ぎぬ。幼童は辛うじて救はれぬ。
そはその驛長の愛子なりけり。驛長の喜譬ふるに
物なく、彼はエジソンを拔擢して通信技手となせり。
エジソンの志業は、ここにはじめてその緒に就きぬ。
彼は通信の職に在りて、最も注意して電信の學理を

研究し、その考察を進めたり。

これよりエジソンの名漸く高く、彼は遂にニューヨークの附近において、一大實驗室を設立することを得たり。かくて、そこに種種の發明を大成したり。就中、その蓄音器・活動寫真鏡の發明、及び電氣燈の改良等は最も著名なるものにして、彼の名聲は、これによりて全世界に響き渡れり。(落合直文―中等國語讀本)

一一、石炭

我等が利用する天然物の中にて、その最も要用な

すまはし
(記)

る物は何なるかと問はば、何人も先づ指を石炭に屈するなるべし。今かりに、この石炭をば、姑く我等の社會より取り去られたりとして、その結果を想像せば、我等の産業はいかに落莫の觀を呈すべきぞ。すべての蒸氣機關は、殆どその運轉をとどめ、交通の最大機關たる陸の鐵道・水の汽船も活動せず。この新世紀の文明は、まさにその一半の光輝を失ふに至らん。ああ、何人か、かかるいまはしき想像に堪ふるものぞ。

英國の工業は世界の最も隆盛なるものと稱せらる。その然る所以のものは、主として英國が石炭の産

懶—嬾

出に富めるによれり。嘗て世界の海國と稱せられて、領土全地球にあまねかりし彼のスペイン國は、限なき多額の金銀をば、その新領土より齎し歸りて、頻りにその富に誇りたりき。されど、その結果は如何。美しき貴金屬の光に眩目し、その富に心酔したるこの國民は、相率ゐて、皆遊蕩懶惰の風に陥りて、國勢は遂に衰へぬ。英國はこれに反して、その産出する多額の石炭を利用して、頻りにその工業を勵み、遂によく今日の富を致すに至れり。かくて、彼等は常に、「我等の石炭は、よく貴き金銀にうち勝てり」といふとか。思へば、工

松—奈

業社界の人人が、これを賞揚して、「黒き金剛石」と呼ぶもの、決して偶然にあらざるなり。

さても、石炭はいつの時代に、いかにして成立したるものなるべきか。學者の説によれば、石炭の地層は、きはめて舊き時代の成立に屬すべきものにして、その時代に地上に生息したりし蕨木賊、石松などの植物が、地中に埋没せられて、かくて、石炭に化成せるなりといふ。

當時の植物界が、いかにおそろしき發育をなして、いかに雄大なる繁茂の光景を呈したりしかは、われ

らの到底想像し得べきものにあらず。嘗て外國のある鑛區にて、石炭の地質中より、太古の木賊を掘り出したることありしが、幹の直径五寸に過ぎたりといへり。豈に驚くべきことならずや。

さて、これら前世界の植物が、いかにしてこの石炭に化成したるかといふに、吾等の知ること能はざる一大現象ありて、地中の泥土は一時に噴出し、かくてこれらの植物を、生きながら深く地中に埋没せしが、また、吾等の想像すること能はざるばかりなる、おそろしき熱と壓力とありて、遂にかかると一種の特産物を

象—象

をば化成したるものならん。

かくて、數百千年の間、この石炭は深く地中に埋没して、嘗て世人の目に觸るることなかりしが、近く數百年のむかし、偶然に發見せられたり。されど、その始は、ただ僅に山村のはかき小屋にて、その夜の燃料に用ひらるるのみにて、さまで世人の注意をひかざりしが、工業の進歩につれて、いつかその效用の著しきことを認められ、遂に活潑なる産業社會の舞臺に上るに至れるなり。(落合直文—中等國語讀本)

このんで
(好みて)

一一一、支那人の長所

わが邦人、好んで支那人の短所を説く。されど、その長所に至りては、多くこれを知らざるもの如し。余は、彼等の長所につきて學ぶべきもの、決して一二に止らざるを見るなり。

余の第一に支那人に敬服するは、その信用を重んずることなり。彼等は數萬圓乃至數十萬圓の取引をも、ただ一片の口約にてなすなり。しかして、その渝らざること、確として實に磐石の如きものあり。この一點においては、さすがの英國商人も、舌を捲きて驚け

さかんなり
(盛りなり)

りとぞ。嘗て一たび足を香港に入れしものは、皆その地における支那商人の勢力の、いかに盛んなるかを説かざるものなし。しかして、その重なる原因は、その商業的信用の鞏固なるにあること、亦、具眼者の常に言ふ所なり。

支那人の忍耐の強きは、更に驚くべきものあり。彼等は實に幾多の勞苦に耐へ、幾多の歳月を犠牲にして、遂によく瘠土として有名なりし彼の新嘉坡をば、今の鬱蒼たる菜園に化し去りしにあらずや。かくの如くにして、彼等の忍耐力は、時として造化の力を奪

ふことあり。その遠く異域の地に入りて、殆ど人跡の到らざる寂寥茫漠の地に、さびしき草庵を結び、土地を拓き、牛羊を牧し、果樹を植ゑ、以て、その貨殖の道をはかり、十數年の長きにわたりて、少しも倦む色なく、悠然として自得する忍耐力に至りては、到底、他の國民の企て及ぶ所にあらざるなり。

支那人は、また、その團結力頗る固くして、互に協同の保障をなす美質あり。總じて、支那人は、いづこにても往かざるところなし。かくて、彼等はいづこに往くとも、決して孤立せざるなり。彼等は、必ずその同種類

の業務を通じて、互に相協同し、その整備したる組合の嚴重なる制裁の下に活動するなり。合すれば強をなすといふ眞理は、彼等の實踐して、その利を收めつつあるところのものなり。

その他、彼等が物に精細なるが如き、節儉なるが如き、勞苦を事とせざるが如き、しかして、いかなる場合にも、冷靜に物を打算するが如き、その終極の目的のためには、いかなる屈辱をも辭せず、いかなる危険をもあへてするがごとき、みな争ふべからざる彼等の長所にして、わが邦人の、つきて學ぶべき所のものな

り。(徳富猪一郎)

一三、天野屋利兵衛

天野屋利兵衛は、大阪の商人にして、大阪町總年寄を勤めたり。その祖先仁齋といへるもの、茶道の嗜ありて、諸侯の家に入らせしかば、その縁故により、利兵衛の代に至りても、なほ諸侯の家に入入することを得、殊に赤穂の城主淺野氏の眷顧を受けたり。

されば、元祿の變あるや、利兵衛走りて赤穂に赴き、平生の恩に報いんとす。時に、大石良雄、諸士と復讐の

侯一侯

議を定め、堅く秘して其の謀を洩さず。世絶えてこれを知る者なかりき。然るに、良雄ひとり利兵衛の人となりを知りて、その謀を告げ、且つ、用ふる所の一切の兵器を製造せしめぬ。利兵衛深くその知遇に感じ、自ら工肆の間に奔走して、一器を製すれば一器を送り、かたくその秘を守りて、妻子にだに毫もこれを知らしめず。たまたま鍛工神力といふもの、其の製作の奇異なるを怪しみ、諾して造らず、直にこれを町奉行所に訴ふ。奉行すなはち利兵衛を召して詰責す。利兵衛曰はく、坊間盜難に備ふる爲に作れるなり。其の製作

創 初

こうて
(請ひて)

の異常なるは、一武人の創意する所に倣へるのみ」と。
 時に府下の鍛工傳へ聞きて、後難を恐れ、利兵衛のた
 めに兵器を作れるもの、一時にこれを訴ふ。ここにお
 いて、奉行遂に利兵衛を獄に下し、拷問すること甚だ
 嚴なり。然れども、更に屈する色なし。困りて、妻子を捕
 へて拷問を加ふ。利兵衛曰はく、「家人少しも與り知ら
 ず。請ふ、其の受くる所の刑を以て、利兵衛の一身に加
 へられよ」と。奉行更に水火を以て利兵衛を鞠訊せし
 かば、軀に完膚なきに至り、殆ど氣絶せしこと數回な
 りき。利兵衛請うて曰はく、「此の事深き仔細あり。始よ

讎 讐

り生を期せず。但し、明春に至らば自首すべし。然らず
 んば、身壘粉せらるとも、決して實を首せじ」と。従容自
 若として毫も臆する所なかりき。

其の年も既に暮れ、世間赤穂義士復讎の事ありし
 を喧傳す。利兵衛これを聞きて、自ら出廷を請ひ、其の
 虚實を確む。奉行松野河内守、實を以て答ふ。利兵衛悦
 びて自首して曰はく、「僕、世世赤穂城主の眷顧を受く、
 義譜代の臣に同じ。諸士事を謀るに當りて、僕に囑し
 て兵器を造らしむ。曩に造りしは即ち其の用なり。今
 既に復讎の事を聞く、僕が事畢はりぬ。只事の洩るる

を恐れ、又、刑の及ばんことを憫み、妻子をして與り知らしめざりき。冀はくは妻子の刑を宥し、僕一人をして鼎鑊に就かしめよ」と聲涙共に下る。奉行これを聞き、其の義心に感じ、死を減じてこれを放ち、家資を其の子に賜ひて、町年寄の職を襲がしめぬ。

はじめ、利兵衛、暑月の頃、赤穂に到り、城庫の什器を曝せるに會ひ、良雄に請ひてこれを一覽せしに、偶、一玉椀紛失す。衆皆利兵衛を疑ふ。良雄大いに驚き、利兵衛を召し、語るに狀を以てす。利兵衛恬然として曰はく、「僕實にこれを竊めり、速に刑を受けん」と。時に近侍

の者密にこれを侯に告ぐ。侯袖間より之を出して曰はく、「われ取りて玩弄せしのみ、彼の知る所にあらず」と。是に於いて、群疑始めて解けたり。良雄、心に其の人となりを奇とせしかば、元祿の變起るに及びて、大事をこれに託せしなりとぞ。出獄の後、京師に入り、瑞光院に寓し、姓名を變じて松永土齋と稱し、壽を以て終はれりといふ。(横井時冬一商人鏡による)

一四、母に上るその一

私事今度江戸へ下り申し候ふ存念、豫ても御物

殿様
淺野長矩。

生強
なまじひに
(愍)

語申し上げ候ふ通り、殿様御憤を察し奉り、御家の御恥辱をすすぎ申したき一筋に御座候。且つは、士の道をも立て、忠のため命を捨て、先祖の名をも顯し申したき儀に御座候。勿論、大勢の御家來にて御座候へば、御厚恩蒙り候ふ侍も御座候ふ處、さしての御懇意にも遊ばし下されず、人並の私儀にて御座候へば、この節、大抵に忠をも存じ、永らへ候うて、そもじ様御存命の間は、御孝養仕り罷り在り候うても、世の譏もあるまじき我等にて御座候へども、愍に御側近き御奉公相勤

〇
はら
(憤)

め、御尊顔を拜し奉りし朝暮の儀、今以て片時も忘れ奉らず候。誠に大切なる御身を捨てさせられ、忘れ難き御家をも思召し放され、御鬱憤とげられ候はんと思召しつめられ候ふ相手を御討ち損じ、剩へ、淺ましき御生害とげられ候ふ段、御運の盡きさせられ候ふ事とは申しながら、無念至極。恐れながらその時の御心底おし量り奉り候へば、骨髓に徹り候うて、一日片時も安き心御座なく候。されども、御短慮にて、時節と申し所と申し、一方ならぬ不調法故、天下の御憤深く、御仕

傳へしに
 我らもなむいふ事
 及び申さぬ事全く天
 下へ御恨申し上ぐべ
 き様御座なく候ふ儀
 にて御座候ふ故御城
 は仔細なくさし上げ
 たる事に御座候。これ
 天下に對し奉り候う
 て異儀を存じ奉り申さぬ故にて御座候。併し、殿

大
 高
 源
 吾
 筆
 蹟

上野介
 吉良義央

様御亂心にも御座なく、上野介殿に御意趣御座
 候ふ由にて、御切りつけなされたる事にて候へ
 ば、其の人は正しく仇にて候。主人の命を捨てら
 れ候ふ程の御憤御座候ふ仇を、安穩にさし置き
 申すべきやう、昔より唐土^{から}我が朝ともに、武士の
 道にあらぬ事にて候。それ故、早速仇の方へとり
 かけ申すべき處、大學様御閉門にて候へば、御免
 なされ候ふ時分、もしや、殿様御あと、少しにても
 仰せ付けられ、上野介殿方へも、何とぞ品もつき
 て、大學様外聞^{そとに}よくならせられ候ふやうにも罷

大學
 淺野長矩の
 弟

りなり候はば、殿様こそ右の通りに候ふとも、御家は残り申し候ふ事にて候。然れば、我等出家沙門となり、又は、自害仕り候ふとも、憤はやすめ候はんと、この節まで、口惜しき月日をも送り候ふ處に、そのかひなく、安藝國へ御座成され候。閉門御ゆるしと申す名ばかりにて御座候。月過ぎ候はば、何とぞ御世に出でさせられ候ふ事も御座あるべく候はんか。よし左様に御座候ふとても、此の節にて、殿様御跡は絶え申したる事に御座候へば、この上前後を見合はせ申し候ふは、臆病

の仕る所、武士の本意ならぬことにて御座候。この上にも天下へ御訴訟申し上げ、相手へ御手當も下り、大學様にも世間廣く御取立遊ばされ候ふやうに、一命にかけて御歎き申し上げ、是非御取り上げこれなき其の時、相手方へは取りかけ申すべき由、頻りに相談の衆も御座候。尤も一理御座候ふ様には御座候へども、なかなか左様の徒黨がましき事仕るべき道理と存じ申さず。その上、御願ひ申し上げ、御取り上げ御座なきにつき、相手へ取りかかり申し候ふ段、偏に天下へ御

恨申し上げ候ふに等しく御座候。然らば、以ての
外の儀、大學様始め御一門の方方様までも、御爲
宜しからぬ事にて候ふ故、只一筋に殿様御憤を
晴し奉り候ふより外の心御座なく候。

一五、母に上るその二

だんだん右申し上げ候ふごとく、武士の道を立
て候うて、御主の仇を報い申すまでにて、全く天
下へ對し奉り、御恨申し上げ候ふにては御座な
く候。然れども、いかなるおぼしめし御座候うて、

天下へ御恨申し上げたるも同然とて、我我ども
の親妻子に御たたり御座候ふとても、力及び申
さず候。萬一左様の事になり候はば、豫て仰せら
れ候ふ通り、何分にも上よりの御下知の通り、尋
常に御覺悟成さるべく候。御はやまり候うて、御
身をわれと御あやまち成され候ふ事など、くれ
ぐれも有るまじき御事にて候ふまま、必ず必ず
左様に御心得成されたく候。世の常の女の如く、
彼此と御歎の色も見えさせられ、愚におはしま
し候はば、いかばかり氣の毒にて、心も引かれ候

はんを、さすが常常の御覺悟ほど御座なされ候
 りて、思召し切り、かへつてけなげなる御勸にも
 預り候ふ御事、さてさて、今生の仕合、未來の喜、何
 事かこれに過ぎ申し候はんや。あつばれ我我兄
 弟は、武士の冥利にかなひ申したる儀と、淺から
 ず本望に存じ奉り候。さきさきの首尾のほど、御
 心にかげさせられまじく候。私三十一、幸右衛門
 二十七、九十郎二十三、いづれも屈強の者どもに
 て候。たやすく本望を遂げ、亡君の御心をやすめ
 奉り申すべく候ふまま、御心やすく思召し、ただ

幸右衛門
 小野寺幸右衛
 門、源吉の實
 弟。
 九十郎
 岡野金右衛門
 の幼名、源吉
 の從弟。

112
1212

よはひ(齡)

御息災にて、何事も時節を御待ち成さるべく候。
 御齡もいたう御傾き、幾程あるまじき御身に、嘸
 御心細く、便もあらぬ御方に、乏しく月日を御凌
 ぎ遊ばし候はんと存じ奉り候へば、いかばかり
 心憂く候へども、其の段力及び申さず候。時に臨
 み候うては、主命を背き、父母を肩にかけて、如何
 なる山の奥野の末にもかくれ、又、主君の爲に父
 母の命をも失ひ申し候ふ事、義と申すものの止
 み難きためしにて候。これらの道理暗からぬそ
 もじ様にておはしまし候へども、筆に任せ申し

九十郎母
故岡野金右衛門の妻。
お千代
九十郎の妹の名。

殘し候。九十郎母とお千代へも、よりよりは仰せ聞かされ候うて、必ず必ず愚に悲しみ申さぬやうに、互に御力を添へさせられたく候。幸かな御法體の御身にて候へば、この後、いよいよ以て佛の御勤のみにて、憂さかたしつこくとつらもつらさも御まぎれましまし、未來の事、朝暮に御忘なく、世も穩に御座候はば、寺へも節節御參り遊ばしたく候。一つは御歩行御養生ともなり申すべく候。乳母にもあきらめ候ふやうに、よく仰せられたく候。かしこ。

元祿十五壬午年九月五日 大高源吾

(赤穂義士實話)

一六、格言

一、樹靜ナラント欲スレドモ風停マズ。子養ハント欲スレドモ親待タズ。往キテ來ラザル者ハ年ナリ。再ビ見ルベカラザル者ハ親ナリ。

(孔子家語)

一、身體髮膚コレヲ父母ニ受ク。敢ヘテ毀傷セザルハ孝ノ始ナリ。身ヲ立テ道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚ゲテ、以テ父母ヲ顯スハ孝ノ終ナリ。孝經

汎一汎

一、入りテハ則チ孝、出デテハ則チ弟、謹ミテ信アリ、汎ク衆ヲ愛シテ仁ニ親ヅキ、行ヒテ餘力有レバ、則チ以テ文ヲ學ブ。(論語)

一七、書籍の用

常に良き書籍に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを覺えず。師を求めざれども、日に月に學ぶ所あり。失意をも慰め、不平憂悶をも忘る。書は少年の滋味にして、老年の娛樂なり。順境には心の飾となり、逆境には庇護と慰藉とを與ふ。家に在りては心を樂し

邪一邪

ましめ、外に出でてても邪魔とはならず。夜の伴旅の伴、僻地の伴なり」と、羅馬の名士シセロの言ひたるも同じ意なり。されど、かくの如きは、人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に「百聞は一見に若かず」といへるは、何事も其の身親しく經驗するに若かずといふ意味なれども、人の壽命に限あれば、七十八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何もあるべからず。我が日本國內の山水風土のみにてても、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮なきを思

へば、人間一身の經驗の狭く淺く小さく且つ少なか
るべきは、言ふに及ばぬことなり。されば、今も昔も、苟
も事物の眞理を知らんと欲し、事物の眞相を觀んと
欲する人人は、一方には、見聞を弘め、經驗を積むと共
に、他方には、廣く内外古今の良書を得て、これに親し
まんことを願ふべきなり。所謂良書は、人間世界開け
てこの方、凡そ三千年間に出でたる大賢碩學の經驗・
觀察・思索・想像を、そのままに傳へたるものなり。或は
これを顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。固より人工
に成りたるものなれども、人をして、肉眼にて看得ざ

る微なるものをも、遠く且つ大いなるものをも看取
せしむ。後れて生まれたる者にして、良書の助を借る
ことなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界
の事も人間界の事も、僅に一斑を窺ふに過ぎざるべ
く、其の一斑さへも正しく明には看得ざるべきが常
なり。要するに、書籍は知識の寶庫にして、兼ねて智を
研く砥石なり。しかしながら、讀書の用は尙これに盡
きたるにあらず。

人は良書に親しみて、まづ我が身の淺薄卑陋なる
を知るなり。次には、或は他の識見の大いなるに驚き、

研一研

或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く清く美しく偉なること、かくの如きものもあるか」と歎ずるなり。若しかりそめにも、其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書籍の用また極れりといふべし。(坪内雄藏—中學修身訓)

三學新 一八、 祕藏の瓶子

我に要あるものを人に與へんことは難かるべけれど、我に要なく人に益あらんものは、ただ速に贈り

えび(海老)

からばし(香くはし)

與へんこそ宜しかるべけれ。白紙を多く蓄へ持てば、紙の蠹いつの間にか之を蝕ひ、フラネルを多く蓄へ持てば、フラネルの蛀何時か之を食ふ。有より無にゆくは物の定まりたる習なれば、たとひ石の唐櫃に祕め藏めて、鐵の海老錠をさし固めたればとて、月日流れ移らば、桃は終に必ず其の甘き液を失ひ、橙は終に必ず其の芳しき香を失ふべし。若し又、智を竭し、勞を敢へてして、或は能く物を保ち得とも、物遣りて人亡びなば、何の甲斐かあるべき。ただ味甘く、香芳しき中に人に與へんには若かじ。昔の富者元載といへるは、

身死して家に胡椒八百石を残したりきといふ。如何に多くの客を日日に饗應せんとすとして、八百石の胡椒を何にかせん。財に富みて徳に貧しき人の爲すことは、都べて此に類する者多し。憫みつべし。

或人、外國より歸りし友に、いと美しき玻璃の瓶子を貰ひけるが、物吝みする癖甚だしき人なりければ、之を碎き破らんことを恐れて、彌生の節供の白酒盛る料になど、妻のいふをも用ひずして、ただ箱の中に秘藏しけり。然るに、或時ふと其の箱を開き見るに、何時如何なる物の響にか壊れけん。三つ四つに碎け居

やよひ。
(彌生)

かう(斯く)

ければ、妻を責め婢を罵りて、おのれらこそかは仕たらめと、雷の落ちかかるが如く怒り喊き、やがては全く知らぬ由を訴へて啜り泣する妻婢と共に、おのれも只管啜り泣しつ、氷ときらめく目の前の缺片を見ては恨み歎きけりとぞ。

瓶子は酒なり水なりを盛りてこそその甲斐もあらめ、用ふること無く、箱にのみ藏め置かんには、何の甲斐あらん。傍眼よりその人の上を思ひ見るに、一度だに其の瓶子を用ひたることなれば、瓶子忽ち來り、瓶子忽ち去つて、ただ、これ瓶子を夢に見たるに

等コトしかるベキを、泣きたる其の涙のみの眞なるこそ、
世にも拙く愚しきわざに思ひなさるれ返す返すも
我が用ひぬものは、人に與へんには若かじ。相悦びて
笑まざらんまでも、相恨みて泣かざらんかた賢かる
べし。(幸田成行―潮待ち草)

一九、今様

年内早梅(岩下貞融)

きほふ(競)

暮れゆく年の 白 雪 に、
きほふ梅こそ をかしけれ。

春風さそふ 長き日は、
いづれの花か 咲かざらむ。

社頭雪(白石千別)

あけの玉垣 うもれつつ、
杉生のみどり 色もなし。
三つの燈火 ほのぼのと、
雪にあけゆく 稻 荷 山。

すぎふ(杉生)

二〇、伊勢神宮

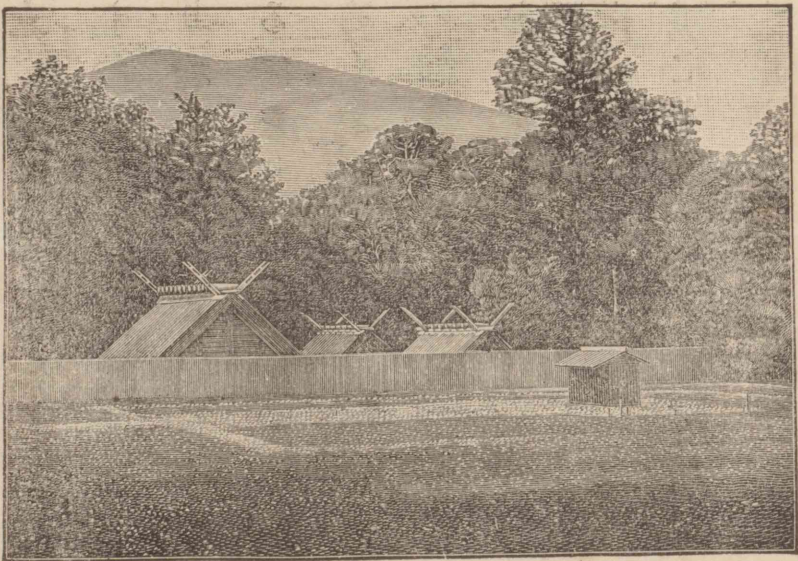
諫鼓云々
朗詠に「刑鞭
蒲朽盤空去、
諫鼓若深難
不レ驚」

神職
宮司
禰宜
主典

宇治橋に至れば、五十鈴川清く流れて、神路山は高
く茂りたり。神苑は心地よく掃き浄められて、青竹の
柵の中には毛色美しき雞の、こともなげに群れ居り。
まことや、諫鼓若蒸して、雞驚かずとこそいへ。安けく
治まる君が代は、神の御庭も長閑けくて、群おひの小
松も、幾千代かけてかはらぬ緑の色ふかし。下馬さき
より脱帽して進みつ。川邊に下り立ちて、口を嗽ぎ、手
を洗ふ。そのすがすがしさいはん方なし。水すき徹り
て、底のさざれ、鱗ふる魚の數もよむべし。

やがて、神宮に詣づ。禰宜がうつ拍手の音、宮人の吹

太しき
美稱(知子)



伊勢神宮

く笛の聲、山川にひびき
渡りて、神代の昔ぞしの
ばるる。森森として下蔭
小暗き杉むらの中に、清
浄なる白木造の宮柱、太
しき立てて鎮まりまし
ます。まことに世の外な
る境にて、物深く、かうが
うしさいふばかりなし。
かしこみて御垣の下に

茅茨翦らず
墨子に「堯堂
高三尺、土塔
三等、茅茨不
刊」
と載る

立ち寄れば、えも知らぬよき薫のして、何となく身に
しむ心ちす。御門には白絹の幕おろされたり。ただあ
りがたさに、われ知らず頭のさがりて、大地に額づけ
るに、をりから、木の間を洩れくる日の光の、わが頭に
さしかかるも尊しや。かけまくも畏かれど、この神宮
の御靈代は八咫の御鏡にて、天祖天照大神を齋き奉
れる皇朝の宗廟におはしますを、かの唐土にても、茅
茨翦らず、采椽刊らずとか。この質素なる宮居の御さ
まこそ、わが國の御代萬歳の瑞なるべけれ。
廣前を立ち出で、しづしづ歸さの道を辿りて、御厩

繩一繩

の方に至らんとすれば、假小屋のいくつもありて、普
請の最中なり。番匠は、いづれも清き白丁著て、襷をか
け、股立とりて業につき、小屋は青竹の矢來して、注連
繩を張り渡したり。用材は悉く檜木にて、みな木曾の
山中より出づるものなりとぞ。御遷宮の折の、如何に
いかめしく尊からんとぞ思ひやらるる。
そもそも、この改造の御掟は、天武天皇以來の禮典
にして、千餘年來の舊儀なり。亂世のころ、御造替式年
の制中絶せし事もありしかど、大かたは行はれたる
なり。あはれ、國民として誰か神宮の尊嚴を敬仰せざ

るものあらん。しかれども、これを聞くよりも見るは
まされり。わが國民たるもの、必ず神宮にまうづべし。
神宮は實に忠愛の眞情を養ふ本源なり。

二一、カミとマゴコロ

我が國民の精神には、太古より、明に君臣の分が定
まつて居る。天孫の御血統が、すなはち帝位を紹がせ
らるべき種で、その餘のものは、皆この國土に居て、そ
の下に服従すべき種と定まつて居る。皇室は一種別
なものである。我等國民よりは、一段高いものである。

47

おほやけ
(公)

これはカミである。長上である。神である。カミといふ
語は、すべて、上にあるものを意味する。今日でも、宮中
では陛下の御事を、お上と申し奉るのである。又、昔か
ら現神、現人神と申すは、すなはち現在生きてお出で
なされる神といふ意である。漢字で書けば、神と上とは
違ふが、國語では區別がない。

皇室を敬ひ奉ることはこの通りであるが、ただ神
として畏れるばかりではない。皇室の事をオホヤケ
といふ。大家の義である。皇室に對しては、我等は小家
である。即ち皇室は我等の本家であるといふ考があ

る。この思想には、皇室と國民との關係に親愛の意味の籠つて居ることが見える。統治者と被統治者といふ問題ではなくして、心の底から、上下互に親睦して居る趣がある。八百萬の神は、皇孫の事業を翼賛せられた人人ばかりで、義理づくに服従して、おそれて居られたのではない。大本家の統領として、親分として、尊敬して居られたのである。親子的關係が成立して居るのである。親の命令は、子として聽かねばならぬ。親の心を喜ばせねばならぬ。親からは何を與へられてもうれしい。親子の愛情は、人の至情で、これがマゴ

やほよろづ
(八百萬)

コロである。このマゴコロが即ち忠である。忠といふ語は漢字の音であるが、これを譯せばマメゴコロ、つまりマゴコロの外はないのである。日本では忠も孝も同じ事で、どちらも同じくマゴコロである。

このマゴコロを以て皇室に對するが、國民の情である。神のやりに尊んで、神のやりに畏れ、親のやりに頼みにして、親のやりにありがたく思ふ。それ故、天皇の命とあれば、どんな事でも服従する。どんな事でも言付けを聽く。いやいやするのではない。有りがたがつてするのである。土地返上などは愚なこと、身命も

改訂高等女學讀本卷四 (水漬) 草むす(草茎) 九〇 天皇(天皇) 鳥居

よろこんで (喜びて)

海ゆかば云々 萬葉集、大伴家持の歌の句。

いはゆる (所謂)

牆—墻

喜んで差し出すのである。

海ゆかば、みづく屍、山ゆかば、草むす屍、大皇のへにこそ死なめ、かへりみはせじ。

といふ奉公の精神は、即ちここで生ずるのである。いはゆる大和心も、このマゴコロをいふのであらう。元寇の役に大敵を追ひ拂つたのも、このマゴコロのためであらう。兄弟牆に閱いても、いざとなれば、舉國一致外侮にあたるといふ精神、この皇室を保護し、この國土を維持しようといふ精神、即ちマゴコロは、困難のあるごとに、たちまちに發現して來る。ただ、このマ

ゴコロの精神が、萬世一系の國體を成した原因である、東洋唯一の大強國となつた所以である。

(芳賀矢一—國民性十論)

二二、鏡

「鏡は一物をも蓄へず、私の心なくして萬象を照らすに、是非善惡の姿現れずといふことなし」と、親房卿はいへり。鏡はもと形を照らす具なれども、やがては心を照らすものともせらる。凡そ、人の心は其の面に表るること多し。悲しめば泣き、喜べば笑ひ、憂ふる時

は眉をひそめ、怒る時は目を逆立つ。我が感情の激する時、我は自ら悟らねども、他人より見れば、明に心の奥の知らるるぞかし。かかる折、自ら鏡を取りて照らし見んに、いかでかその姿の醜く口惜しからざらん。古き歌に、

鏡には姿ばかりの映るぞと

思ふ心のはづかしきかな。

鏡は古より女子の魂と稱して、男子の刀に於けると比儔せり。これ其の姿容を整へよといふのみにはあらず。女子は殊に感情の激し易きものなれば、朝に

か
ろ
や
希望

夕に之に向ひて、自ら省みよとの訓なるべし。

おもんずる
(重くする)

我が國民の鏡を重んずることは、其の由來最も遠し。八咫鏡は三種の神器の一として、伊勢の内宮にましますこと、申すも畏し。神社の拜殿に神鏡を懸けたるは、太古よりの遺風にて、これに對ひて、明く清き心を照らし見んの意なるべし。

畏かれども、明治天皇の御製にも、

榊葉にかけし鏡をかがみにて、

人も心を磨けとぞおもふ。

うち向ふたびに心を磨けとや、

鏡は神のつくりそめけむ。

(高等小學讀本)

二三、水兵とその母

一日、余は前艦部に行かんとして、藥劑室の傍を過ぎしに、部下の年若き一水兵、片隅に坐して、一通の手紙を前に置き、愁然として涙ぐむを認めぬ。余はしほしその背後に佇みて、つらつら眺め居たりしが、あまりに女女しき振舞に心激して、思はずも詞鋭く、未練者、何故の涙ぞ。命惜しくてか、妻子に心残りてか、男兒

軍籍に入りて千載一遇の戦に出づるは、武人の本懐と喜ぶべきに、見苦しきその涙は何事ぞ。兵士の恥は艦の恥なり、艦の恥は帝國の恥なりと知らざるか」といひ放ちぬ。彼は驚きて立てり。立ちて涙を拂ひ、涼しき眼に余を屹とうちまもりたりしが、やがてまた愁然と頭を垂れぬ。未練者とはあまりの仰なり。われ未だ妻なければ、固より子もなし。數ならねども日本の兵士なり。命惜しとていかでか泣くべき。願はくはこのふみ御覽ぜよ」といひ終はりて、彼は手にせる一通の手紙を恭しくさし出せり。余受けてこれを披き見

るに、筆跡いと拙くして、文章もまま解し難き所あれども、その意は實に左の如くなりき。

聞けば、御身は豊島の戦にも出でられず、またこの度威海衛とやらにても格別の手柄も立てられぬとのこと、さてともさてもいひ甲斐なき次第と、母はただただ残念に存じ候。何のため軍には出られ候ふぞ。一命を捨つるが君に報ゆる軍人の役目と覺え候ふ上に、また心苦しきは、村のかたがたの御心付けにて、朝に夕にいろいろとやさしくなし下され、ただ一人の御子息は、國のた

豊島

黄海にあり。明治二十七年七月二十五日我が艦隊清國の艦隊を豊島沖に破る。これ日清戦役の始なり。

威海衛

支那山東省、直隸灣の南岸にあり。日清の役に、清國北洋艦隊の根據地なりき。

めに軍に出られ候ひしなれば、留守中不自由なる事もあらば、何にても遠慮なく仰せられよとの御親切、そのかたがたの顔見るたびに、そなたの腑甲斐なき事、なほなほ思ひいだされて面目なく、母の胸は張り裂くるばかりに候。鎮守の神様に日参いたし候ふも、そなたの無事の歸國を祈るにてはこれなく、天晴なる討死を遂げさせ給へとの心願に候。さればとて、母も人間に候へば、我が子憎しとはつゆおもひ申さず。いかばかりの思してこの手紙認め候ひしか、よくよく御

推察ありて、御覺悟のほど頼みいり候。

言言みな肺腑より出でて、一語は一語より切なれば、余は殆ど讀むに堪へず、心の中にて、嗚呼、いかなれば、わが同胞のかくまでに報效の一念堅きぞ。母としてわが子に向ひて死ねよと教ふる胸中を察すれば、鬼神といへどもその壯烈に泣くべし。ああ、泣くべし、泣くべし。涙のかぎり泣き盡すとも、誰かこれを未練と笑はん。事の由をも問ひ究めずして、叱りし我こそ、今はなかなかに恥かしけれ。さだめし元は由緒ある武士の血統なるべし。などおもひて、彼の背を撫てつ

つ、恕せよ、忠孝の武夫。未練者といひしはわが誤なり。子が母堂の赤心、われただ感激の外なし。おもふに子は弓馬の家に生まれし者ならん」といへば、かれは頭をうち掉りて、否、我が家は代代鹿兒島の濱邊にありて、見るかげもなき漁民なり。早く父に別れて、一人の兄弟もなし。年老いたる母のみ家に留めて出陣せしに、見給ふ如く、親にさへ肺腑斐なしとたしなめられて、餘りの口惜しさに、覺えず落涙せり」と、いひ終はりてまた涙を垂れぬ。

余は又、目をしばたたきつつ慰撫して曰はく、口惜

い。た。づ。ら。
(徒)

しと思ふはことわりなれど、海軍にては、陸上の戦と異なり、われ獨り進みて功名せんこと思ひも寄らず。艦長を頭とし、兵士を手足とし、力を合はせ、心を一にして、一艦一人となりて戦はざるべからず。されば、各よくその職務を守り、騒がず、懼れず、よく號令に従ふこそ水兵たるものの役目なれ。豊島の合戦にいて遇はざりし遺憾は子等のみかは、艦長はじめ諸士官のひとしく歎ずる所なり。されど、これも天なり、時なり。自ら顧みて疚しからずば、誰に對して何をか愧づべき。徒に死を急ぎて輕輕しき振舞をなすは、愛國の武

夫がなすべきことにあらず。遠からず一大快戦もあるべければ、その折こそは、將校兵士力を合はせて目覺しき働をなし、わが高千穂の名を世に揚ぐべきなれ。決しておのれ一人の功を貪らんとて、一致の力を破る勿れ。よくこの理を具に認めて母に贈り、以てその心を安んぜしめよ」と。かれは頭を低れ、唯唯として聞き居たりしが、やがて右手を舉げて敬禮し、欣然として立ち去れり。
(小笠原長生―海戦日録)

二四、雪

朝ぼらけ云々

古今集に出て
たる阪上是則
の歌。

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

吉野のさとに降れるしら雪。

これは降り積んだ雪を、朝戸開けて残月の影と見
まがうたおもしろい景色である。降り積んだ雪も美
しいが、大空を蔽うて、盛んに降りしきる雪景色は、ま
た譬へん方なき美観である。雪は鷺毛に似て飛んで
散亂し、人は鶴氅を被て立つて徘徊すと、唐の白樂天
も歌つた。銀沙を散らすやうに、玉屑を撒くやうに見
て居る中に、葉一つも無い冬木立も、常磐木の林も、眞
白に綿を懸けたやうになる。氷山峨峨たる北海の地

雪は鷺毛に
似て云々

唐の白樂天の
詩の句「雪似
鷺毛飛散亂人
被鶴氅立徘徊」
和漢朗詠
集にも出てた
り。

では、面白いといふよりも、寧ろすさまじい景色であ
らうが、我が國の秀麗な山川を降り埋める六花紛紛
たる奇観は、芭蕉翁でなくても、

いざさらば、雪見に轉ぶ所まで。

の感を起すは當然である。

雪は貧富貴賤の差別なく、その純白な色を以て天
地を一つにする。金殿茅屋も皆同じやうに粧はれる。
げにや、花ならば咲かぬ梢もまじりなん。なべて降り
にし白雪のといふやうに、眼に入るもの、すべてその
下に埋れてしまふ。三千世界銀成色、十二樓臺玉作層

花ならば云々

新編古今集、
律師仙覺「花
ならば咲かぬ
梢もまじらま
し、なべて雪
降らみよし野

の山。
三千世界云々
宋の劉師道の
作。

の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして
廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來
るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚
く感ぜられる。霏霏と散り、紛紛と飛んで、唯一條の川
水を残して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を
敷きつめる美觀は、眞に人目をも眩せしめる。よしや
薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じ
は少しも變らぬ。花紅葉色の眺は、元より美しいに
相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目のさめるや
うな心持がするが、花も紅葉もない冬枯の時に、地上

の萬物が、この銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧をつくしたものと、いふべきではな
いか。(芳賀矢一「月雪花による」)

二五、雪の歌

香川景樹

○
照る月のかげの散り來る心地して、

夜ゆく袖にたまる雪かな。

○
加藤枝直

朝日かげまづさすかたの片枝より、

色あらはるる松のしら雪。

○
中島歌子

いつの間に積りし今朝の雪ならむ。

曉までは月も見えしを。

二六、茶僧利休

豊太閤大阪城におはしたる時、その傍を離さず寵愛せられたる曾呂利新左衛門は、茶僧利休と甚だ不和なりければ、何の時に、利休に不都合をなさしめんと考へ居たるに、或年の冬、日の暮るる頃より、雪頻

りに降り出で、夜半に至りて、地に積ること七八寸にも及びぬ。時に新左衛門思ひけるは、かかる大雪の夜半に至りては、彼も怠りて、御茶屋の爐の火もたやしたらんに、にはかに御出あらば、さすがの利休も困却すべしと考へて、太閤の寢所の次までまゐり、襖ごしに、新左衛門申しけるは、「いかに御寢ならせられしか。雪おもしろく降りて、御庭の植木美しうなり候ふ。かかる折、時雨の御茶屋に成らせられ候はば、さぞと存じ候ふ」と申したれば、太閤目さめられて、「いかにも然なり。手燭を點ずべし」とて、寢衣の上に胴服を著せら

れて立ち出でらる。

新左衛門前に立ちて、庭の飛石を傳ひつつ、時雨の
 茶屋に至り、折戸の此方より、新左衛門聲をかけて、利
 休殿、只今これまで成らせ
 られぬ」と告ぐ。利休速に答
 へて、折戸口まで迎へ奉り、
 御先に立ちて、植込の枝に
 かかりたる雪を拂ひつつ、
 圍の内に入れ奉るに、新左衛門もつづきて入る。さる
 に、何時の間にか、爐につぎたる炭は盛んにおこりて、



千利休肖像

かこひ(圍)

釜の湯松風の音たて、爐の内の薰物はかをりて、早梅
 の香にあやまたれたり。新左衛門は心中案に相違し
 て、この雪夜の深更に、よもやとおぼえしに、さても油
 断なき利休かなとあきれたり。かくて、利休は茶一服
 立てて参らす。太閤も宵の宿酒をほ名残あるところ
 に、思ひかけ給はぬことなれば、常にまさりて賞せら
 れたり。

新左衛門思ひけるは、今は我が策も空しくなりぬ。
 何をがなと考へしが、かかる深更に、湯漬を命ぜられ
 たらんには、これには利休も困却すべしと案じつき

ゑぐる(刳)

て、太閤に申しけるは、夜もふけぬれば、定めて御空腹におはしまさん。御湯漬を仰せ出されて然るべきか」と申しければ、太閤、いかにも然るべし」と仰せらる。利休かしこまりて、水屋に立ち、先に御迎に出でたる時、植込になれる柚の實二つ取りて袂に入れ來しが、その肉をゑぐりとりて、味噌をつめ、爐にて焼き、綿入服紗に包みたる飯櫃より、飯を盛りて奉る。太閤、山海の珍味には飽かれたるところに、思ひがけぬ柚味噌を奉りたりしかば、殊の外意に適はせられ、利休が職務の上にかくまで心を用ふることを喜び給ひて、

加恩の沙汰さへありけり。新左衛門も、今はせんかたなく、却て利休の職務に油斷なきことを、いよいよ感じけりとまゐる。(堀秀成一説教講録)

二七、油斷大敵

寛永の頃にかあらん、永井信濃守尙政、しきりに昇進して寵任せられけるが、その頃井伊掃部頭直孝、一代の元老にておはせしに、或時邂逅して、我等事、弱年の身にて、特恩を蒙りて重職をつとめ候ふ事、誠に至極と申すべく候ふ。そこ許には御老功の御事にて候

寛永 後水尾・明正
兩天皇の時。
永井信濃守 三河の人、直勝の子。元和八年老職に列す。
井伊掃部頭 遠江の人、直政の庶子。元和の初執政となる。

へば、我等心得にもなるべきこと、思召しよりも候はば、仰せ聞かせられ候へ」とあれば、掃部頭まづ感じて、「奇特なる御心得にてこそ候へ。いかにも一つ存じよりたること候ふまま、傳授し候ふべし。されども、大切なることを、あからさまには申しがたし。いよいよ御聞きありたく候はば、某が宅へ御越し候へ」といはれしかば、日を定めて、禮服を著し、彼の宅へ往かれしに、掃部頭出でて對面の後、世話に、「油斷大敵」といふこと、定めて御覺えあるべし。某が傳授外にはなく候ふ。此の一言にて候ふぞ。必ず御わすれあるな」といはれき

とぞ。

むかし、周の武王即位のはじめ、太公望を召して、簡約にして、行うて恒とし、萬世に傳ふべき道ありや」と問ひ給ひしかば、太公望まうさく、其の言丹書にあり。王若し聞かんと欲せば、齋戒し給へ」とありしかば、武王齋戒端冕して、東面して立ち給へり。その時、太公望西面して、丹書の言を武王に授けて曰はく、敬、怠に勝つ者は吉、怠、敬に勝つ者は滅ぶ。義、欲に勝つ者は從ひ、欲、義に勝つ者は凶なり」と。

今、油斷大敵の語、鄙諺なれども丹書の戒に協へり。

むかし云々
大戴禮記に出
づ。

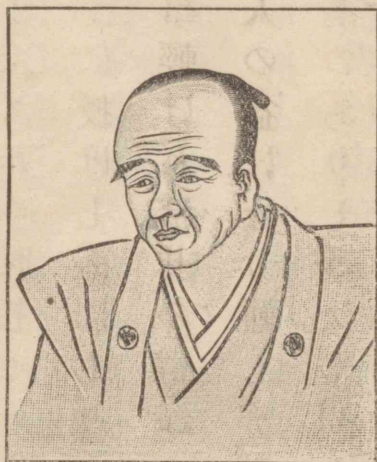
まうさく
(まをさく)

丹書
箴銘の類をい
ふ。

なほざり
(等閑)

毎毎
福処
過失

然るに、君につかへ事を務むるに、油斷の悪しきとは
誰も知りたる事にて、しかも眞實に知らぬ故に、右の



室直清肖像

諺をも等閑に聞きすごし
て、ここに心を留むる人な
し、よりに、毎毎油斷して、過
失を生じ、禍咎を招きて、と
もすれば、臍を噬むこと多

きぞかし。

掃部頭は、常に油斷を禁じて身に近づけぬ心から、
眞實にこの事の簡要たるを知らるる故に、この諺を

拔一抜

大切の事として、信濃守にも傳へられしなり。拔群の
識あるに非ずしては、いかでかくあるべき。その上、あ
からさまにいはず、前に日を定め、其の人に盛服せ
させて、重く傳授せられしも、かの太公望の丹書を武
王に授けし面影あり。かくあらねば、其の事輕し。其の
事輕ければ、其の信深からず。其の信深からぬば、其の
人の益になり難し。亦、誠意懇到を見るべし。掃部頭學
術のありし沙汰も聞かねども、おのづから聖賢の教
に協へるこそ、極めて殊勝の事といふべけれ。

(室直清—駿臺雜話)

刃車コ畫レテ天命
待
執鞭ノ使ト多片
吾ハ元テ勇ス
テヤキハヤサ

二八、運命 その一 吉凶禍福

世の中の出来事の、來りてわれらの運命を左右するもの、その數、日に百千なるのみならず。然れども、われらがこれを認め得るは、唯その表面に顯れ、實際に結果を生ずる一半のみ。その來らんとして來らず、殆ど己の上に附著せんとして遂に附著せず、そのままに消えゆく出来事は、又實に夥しからん。若しわれらが、己の運命を左右する出来事を認むるのみならず、更に又、將にわれらの運命を左右せんとしては空し

く消えゆく、暗暗裏の出来事を認め得んには、われらの生涯の希望と畏怖とは、誠に無限無邊ならん。ダビッドの事、以て見るべきなり。

吾等はダビッドの既往を知らず、また知るを要せず。われらは、今ただ、二十歳の少年、始めて故郷の田舎を離れ、ボストン府なる叔父の廓舗にゆきて、手代とならんとする途上に在る渠を見るのみ。その履歴は小學校及び中學校にて、一通りの教育を受けたりといふのみにて事足るべし。田舎少年の心やすさは、車も借らず、馬も借らず、日出より歩き出して、既に日中

ボストン府
北米合衆國マ
ツサチューセ
ツ州の首府

かたへ(傍)

喬木(松杉)

ヨウ

灌木(ササキ)

ササキ

に至れり。時はこれ夏のなかば、漸く覺ゆる疲勞と、益加はる暑熱とは、渠をしてかたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の過ぐるを待ちて、これに投ぜんと決意せしめたり。

鬱葱たる幾株の喬木丘の上に立ち並び、ほとりには又清らかなる泉の水の湧き出づるあり。たとひダビッドならずとも、往來の人、誰かこの日中にこの樹蔭に逢ひて、一たび憩ふことを懷はざらん。ダビッドはまづ泉の水に渴きたる喉を潤し、徐に負ひたる包を解きおろして、その上に粗末なる木綿の手拭を重

ね掛け、これを枕として仰ぎ臥したり。

太陽の光はうちかさなれる枝に遮られて、ダビッドの身に到らず。往來の路は昨日の大雨に濕ひたれば、いまだ少しも塵を飛ばさず。生ひ茂れる緑の草は、絶好の褥よりも快く柔なり。泉の水の沸沸として、絶えず耳邊に鳴り、縦横せる枝のそよ吹く風のため、よりより微搖するのみ。ダビッドは、忽ち心陶然として恍惚たるうちに、身は既に華胥の國に遊びぬ。

ダビッドは樹蔭に眠りたれど、途上には覺めたる人なほ少なからず。或は馬に跨り、或は車に駕し、又或

は歩みて、以てダビッドの眠りたる前を來往する者
 點點たり。或は傍目もふらず過ぎゆけば、渠のここに
 在ることを知らざるもあり。或は偶、渠がここに横た
 はれるに寓目すれども、おのが心の忙しきに蔽はれ
 て、別に意を留めず過ぎゆくもあり。或は渠の無邪氣
 に眠れるを見て、笑ひつつ去るもあり。或はその路傍
 に眠れるを卑しみて、眉しかめつつゆくもあり。非難
 稱羨、一讚一譏、すべてダビッドの上に聚まれり。而し
 て、ダビッドはすべて感ずるなし。

幾ばくもなく、一輛のはてやかなる輕車あり、毛色

くるひ(狂)

麗しき二頭の馬を糜ぎて、鱗鱗として馳せ來れるが、
 この木立の前に至つて、突然として止まりたり。そは
 一本の轄緩みて、一箇の輪にくるひを生じたればな
 り。車内に居たるは、齡高く品よき商人夫妻なりき。夫
 妻は從者が輪を整ふる間、樹蔭に憩はんとて立ち寄
 りたるが、その下にダビッドの横たはれるを見るよ
 り、俄に驚きて二三歩しりへにさがり、ためつ眇めつ
 凝視して、纔に心を安んじたれば、このうまいせる少
 年を驚かさざるやう、忍び足して再び樹蔭に立ち寄
 りながら、夫は妻に低語せり。あの快げに眠れるさま

しりへ。
(後方)

熟眠

うま^ろ
(熟睡)

を見よ。あの呼吸する氣息の極めて容與たるを見よ。これ健康にして心安らかなる者にあらざれば能はざるなり。もし余をしてかかるうまいを得しめば、余はわが歳入の半ばを割くとも惜しからじ」と。妻は今、風に一方の枝押しやられ、一條の日光洩れて、少年の面を射るを見て、自ら手を伸べ、糾れたる枝を解き、これを蔽ひやりながら、又夫に低語せり。天はこの好少年をわれらに與へ給ふと見ゆるなり。われらが従弟の子の所行に失望せる後、偶然この樹蔭に立ち寄りて、この少年に邂逅するは、誠に不思議のことならず

いる(射)

や。且つ熟視すれば、何となく面ざし逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に渠を呼び醒さんか」といふに、夫は打ち案じて、「そは何の爲ぞ。われらは未だ少年の素性をも知らずして」といへば、妻も稍、惑ひながら、なほ思ひ入りて、「さりながら、かの無邪氣なる容貌、かの無心に眠れる姿を見給はずや」といふ。

二九、運 命 その二

今や一箇の莫大なる福はダビッドの上に臨めり。この老夫妻は、唯ひとりの子ヘンリーを先立たせ、家

に蓄へたる巨萬の富を相續せしむべき者もなく、せめては遠き従弟の子にてもと目ざして、これを尋ねしに、その子は所行不良にして心に適はず、今失望してボストンに歸らんとするなり。人はかかる時に當りては、種種の想像をも畫くものなり。妻は再び繰り返せり、「試に呼び醒さんか」と。

同時に、背後に従者の聲あり、「修覆整ひて候」と。老夫妻は、この聲に忽焉としてわれに復り、相携へて再び車に乗りぬ。ダビッドはなほ駒駒然たり。

老夫妻を乗せたる輕車は、去つて未だ一里は行か

ざるべしと思ふ時、又兩箇の人ありて、この樹蔭に立ち寄りたり。いづれも木綿の頭巾を目深に被りたれば、審に視るべからざれども、顔の色いたく黒くして、衣服粗野に、且つ此處彼處に幾多の汚點さへ印したり。この兩人は、この邊に徘徊する山賊にして、今やその賊物を分たんとて、この樹蔭に來れるなり。かくて、ダビッドの横たはれるを見るより、一人は早くも一人を顧みて、「叱、汝はあの枕にせる包を見ずや」と叫べば、「されど、若し目をさまさん時は」といふを、一人は急に懷中を探りて、匕首の柄を微しく露し示して、「これ

のみ」といふ。やがて兩人はダビッドのほとりに進みより、一人はそのヒ首を抜きて胸に擬し、一人は頭の方にはまりて、その枕とせる包を竊に抽かんとす。

この時、もしダビッドをして、眼を開きて兩人の顔を視しめば、直に以て悪魔とや爲さん。この時忽ち一頭の黄犬あり、鼻をうごめかして、頻りに地上を嗅ぎつつ此處に走り來れり。一人は目ばやくこれを見て、「咄、休めよ、休めよ。狗兒の主人を尋ねてここに至れるならん」と。

一人はヒ首を懷中に收めたり。一人は懷中よりブ

ランデー一壇を取り出せり。仕事の將に成らんとして敗れたるを笑ひ罵り、迭に幾口かを飲むうちに、各黎面に一種の紅を生じ來れり。後にはダビッドのこゝとをば忘れて、がやがやとうち興じつつ、相携へて又立ち去れり。しかもダビッドはなほ齁齁然たり。

一時間の睡はダビッドの疲勞を醫し了へたり。ダビッドは少しく身動きせり。徐にその唇を搖かせり。聲は無けれど、口の中に獨り半殘の夢を語れり。遙にひびく輪聲、既にして殷殷、既にして轟轟、益近くして益、高く、今や轆轤として數歩の間に來れり。これ一輛

の乗合馬車なり。ダビッドは俄に躍り起てり。

「御者よ、茲に旅客あり。」

「上層に席あり。」

ダビッドは馬車の上層に登りて坐せり。ダビッドは前途幾多の望を懸けたる楽しきボストン府に馳せ行けり、かの清泉には一顧盼の別をだにせずして。一度は富の神のここに來りて、黄金の光その水面に照射せることのありしを、ダビッドは知らざるなり。又、一度は死の神のここに來りて、その水上に血を染めんとせることありしをも、ダビッドは知らざる

なり。ああ、渠は生涯竟に之を知らざりしなり。(森田文藏)

三〇、酸からず甘からず (島崎春樹)

梅は酸くして、梅の樹の

葉かげに、青き 玉をなし、

柿あまくして、柿の樹の

こずゑに、赤き 玉なすを、

君は酸からず あまからず、

辛きはいかに、唐がらし。」

答へていはく、われとても、

柿のあまきを 知れるなり、
 梅の酸きを 知れるなり。
 ただ、いかにせむ、 ひとのうへ。
 我はつたなき ものなれば、
 生まれながらに 辛きなり。
 ふたつの味を、 身ひとつに
 兼ねべき世とも 見えざれば、
 のたまふ酸きと あまきとは、
 梅と柿とに まかせおき、
 我はひとつを たのしみて、

せめて、辛きを 守り頼まむ。」

三一、 歐米人の公共道德

一人で居るものは、一人だけの快樂、一人だけの道徳があり、二人で居るものは、二人だけの愉快、二人だけの徳義がなくてはならぬものである。西洋人は共同生活で、居る家も共同、食ふ物も共同、遊ぶ處も共同といふ風だから、何事も公共的に出來て居ると共に、公共道德が、その必要の上から、大いに備はつて居る。家内に在る時、食事をする時、道路を歩く時、公園に

そなはつて
 (備りて)

いはら。
(言はん)

遊ぶ時、さては、喜ばしい時、悲しい時、争ひさわぐ時など、一般にわたつて、おのづから守られて居る道徳がある。我が國においても、道徳は素より大いに備はつてあるのみならず、西洋諸國の上に出て居ることも多いが、今いほうとおもふ公共道徳などの事は、國のありさまが違ふから、我になくて彼にあることが少なくなない。

まづ、家は例の共同住居で、數家族各室に集まつて居る。それ故、出入するには、或は昇降機で上下したり、或は螺旋形の階子を昇降したり、長い廊下を通行し

たりするので、互に守るべき徳義がなくてはならぬ。例へば、降る人は必ず右側によつて歩くとか、昇る人は左側を傳ふとかいふことが定まつて居て、決して衝き當りなどはせぬ。

くしけづる
(梳)

また、食事の時は殊に嚴重で、すこし儀式だつた御馳走でもある時には、まづ化粧部屋に入つて、頸から上を丁寧に洗ふ、髯を剃る、髪を梳る、爪の垢をとる。それから、用意の服を著る。さて、靜靜と食卓に向ふ。食ふにも順序があり、法則があり、庖丁をつかふにも、音をさせるやうな事はせぬ。又、毎日毎日家族同志が食ふ

にも、決して手も洗はずに食卓に就くやうなことはせぬ。まして、大聲を擧げて人の話の邪魔をするやうなことはない。成るべくおとなしい、優しい、人の氣に障らぬやうな話をして、愉快に食事を共にするのである。

道路を歩くにも、また、おのづから定まれる禮があつて、左でも右でもかまはず、心のままにゆくやうな事はせぬ。又、杖や傘を打ち揮つて、人の邪魔になるやうなことは最も慎み、罪もない草木や、石などを叩きながら往くが如きは、野蠻の風としてある。馬車でも、

自轉車でも、一定の法があつて、無暗に出しぬけに來て、通行人を驚かすやうなことはない。

汽車や馬車は乗客の數が多いだけに、その乗降は随分混雜であるが、先著の面より、徐に乗降するやうになつて居て、先を争ふことは決してない。

また、各公園には、水が噴いたり、木が繁つたり、芝が生えたり、花が咲いたりして居るが、入つてならぬ處と、勝手に歩いて宜い處とがある。これは自然と定まつてを、つて、一一札は立ててないが、決して入るべからざる處に入り、登るべからざる山に登りなどはせ

ぬ。見事に咲き亂れて居る花は、小供などは欲しからうと思ふが、その一輪たりとも、折り探るやうな事はせぬ。また、池に石を投げ入れたり、木の枝を折つたりするやうな事はない。

畢竟、西洋各國は、共同生活、共同遊戯、共同運動といふ風に、何もかも共同的に社會が出来て居るから、公共道德がかくのごとく進歩して居る。もしも彼等の國人に、この道德がなかつたならば、直に禽獸世界になるであらう。

我が國の社會は、長い間孤立的生活であつたから、

道德の進歩のしかたが、西洋とは趣が違つて居るので、これもやはり自然の結果である。すなはち、我が國では、個人的道德、家族的道德は比較的備はつて居るが、尙いやが上にもその發達を望むと共に、西洋のいはゆる公共的道德を十分に涵養することが、實に急務であると思ふ。(池邊義象―世界讀本)

三二、訪問及び音信

用事を辨ずるためにのみ人を訪問するものかは、およそ、人と人との交は、必ずしも金錢の貸借、事業の

かは
カイナ
アハナイ

ゆゑん
(所以)

困却トリヤン

疎遠トイハレハシ
トイハレハシ
トイハレハシ

相談の如き、用事のみにて結ぶべきにあらず。別に人としての關係あるものなり。人としての關係とは、所謂交際の事なり。即ち用事以外に交際あるなり。されば、用事なしとて人を訪問せざるは、決して交際の道を全りする所以にあらず。
時も場所も頓著せずして、徒に屢訪問し、長談して、人を困却せしむるは、決して好ましきことにあらず。されど、用事なしとて親しき人をも疎遠にするは、また決して稱すべきにあらず。而して、あまりに疎遠にすれば、遂に闕高くなりて、これを踰ゆることすら、甚

むづかし

だむづかしくなるものなり。山間の小徑も、もし人これを踏まずば、忽ち茅薄生ひ茂りて、その跡を没すべし。人と人との交際も此の如し。折角の親友も、疎遠に流るれば、いつしかその交情は斷絶するものなり。故に、訪問は交際の道において最も大切なり。用事の有無は別として、互に訪問もし、訪問もせらるべきなり。訪問と同じく、交際の道において大切なるは音信なり。とかく、我が國人は、手紙は用事を辨ずるものとのみ心得、用事をければ、いかに親しき間柄にても、時としては、親子の間柄にても、音信をせぬものも少な

まつたうす
(全くす)

からず。これは大いなる心得違にして、決して交際の道を全うする所以にあらず。訪問は、多くは近き場所のみに限られるれども、音信に至りては、星や月の世界にあらざるかぎりには、世界の隅から隅まで行き届くものなり。然るに、これを等閑に附するは、心得難き事にあらずや。

概して、西洋人は能く手紙を書くなり。而して、その手紙を、いかにも精細に、且つ、興趣あるやうに認むるは、まことに殊勝なる事なり。人或は、西洋人を實利的の人間とのみいへども、そは、僅に一面の觀察に過ぎ

ざるなり。彼等は、用事の手紙をば、用事を辨ずるために、直截簡明に書くなり。併しながら、用事以外の手紙をも、やはり書くことの必要なるを知り、その必要に應ずるためには、決して勞を惜しまず。否、彼等は、これを勞と思はずして、却て交際の道を全うする所以なりとなせり。我が國人は、動もすれば用事と交際との區別を知らず。故に、用事の手紙を書くにも、前後無用の文句のみ多く、却て用事の主旨は漠然として要領を得ざるが如きもの少なからず。而して、交際上の手紙に至りては、書く必要をすら感ぜず。折角これを書

きても、いかにも極りきつたる文句にして、何の興味もなければ、何の情趣もなく、千萬里の外にありて、朝夕相見るが如き感を與ふるもの、まことに稀なり。西洋にては、手紙を書くことは、普通男女の嗜として、かならず修練し居るなり。されば、その人の地位如何によりて、巧拙の違はあれども、決してこれを等閑に附せざるなり。

我が國にても、訪問といひ、音信といひ、從來はそれぞれの式もあり、習もありたれども、概して維新の前後に破壊せられたるなり。されば、今日において、訪問

音信の良習を養成するは、家庭および社會改良の上

に、きはめて大切なることなり。徳富猪一郎の文による

三三、書簡文の心得

手紙の文よ、雲井のよそに心をやりて、人の世を離れんとにもあらねば、目に見えぬ鬼神を感じしめん

想像

すなほ。

すべきを筆にいはせて、心通はせんまでの業なり。されば、用語のむづかしきを求めず、極めてわかり易く、すなほなる詞もて、事の筋明に、次第正しう書きなしたらば、その外に事なかるべくやあらん。
ある人、年たけぬるまで、文字書く事を知らず、日日の用事、親・同胞の者にも聞えやらんたづきなく、いとわびしき事に歎きしが、思ひ起して、三十の手習に、いは四十七文字を學びぬ。さて、文のこと書き習ふに、いつしか文の體も備へつ。いと長き用事をも、一句一句に點うちつつ、滞なく書き送る。いと珍らかに、俄な

きは(際)

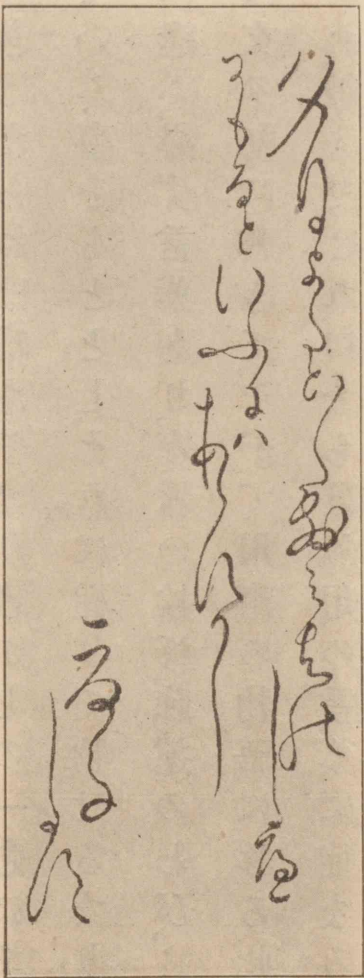
る修業を、いかにしてかくは」と、人の問ひしに、何事にもあらず。もとより、文法・語格をまてたどりてあるべききは身分ならねば、唯あやまり書かじの一念にて、口にていふ事をもとし、それに縋りて物せるなり。人に逢ふ、必ず言葉あり。寒暑の挨拶、疎遠のわび、これをば文の初に書きて、やがて用事の物語に移る。此よりかれ、彼よりこれ、口ならば、無用の言葉に徒なる時をも過すべきなれど、文には紙の限あれば、用なき事をすべて省き、唯いはんと思ふばかりを書き續くるなり」と言ひき。げに、これこそは手紙の文の本意にて、法

本多の何が
し
作左衛門重
次。

た。へらる
(稱)

といひ、心得といふ、この外にはあらざるべし。

「文は短くして事のわかり易きを第一とす」と、人の
いふ。男のなれど、本多の何がしが陣中よりの文、いつ



隨筆子夏口種

もいつもためしに引き出でられては、世にほめたた
へらるれど、そは折からによるものなり。短くてあり

ぬべき時あり、長きを人の樂しむことあり。

遠く離れて逢ひ見るに難く、唯大空をうち眺めて
は、故郷の人人、今いかさまに暮すらん。野山のさまも
なつかしく、彼の家この家いかならん。里の童、鎮守の
森と、さまさま思ひ續くる折、親しき人より文の來た
る、いかかは嬉しからざらん。封じを解くももどかし
う、見るに、暑さ、寒さ、いかに暮し給ふ、この程此處にも
かはりなし、御左右承らばやとのみあらんは、その口
惜しさ想ふべし。かかる時の文の上にては、雜事とて
棄つべきにあらず。一本の草、一頭の犬、媼や翁のこと

あうな(媼)
あきな(翁)

も、ことごとく見る人のなぐさめとなりて、しばし旅
寝の憂さをも忘るべく、げによき友よと、其の人いと
ど懐かしうもなりぬべければ、長さ尋にあまるとも、
こは煩はしからぬことなりかし。

みじかし
(短)

短くてよかるべきは、近火負傷の見舞など、すべて
不慮の事に、人の心あわただしからん折、いと長長と
書き續けたる、見るもうるさく、中中なる心地ぞすべ
き。よろづに、時といふ事は、必ず見はからふべきもの
なり。折に似つかはしからぬ事は、ともすれば、人の心
を痛め、煩を増し、思の外の怒を招く事もあり。

人の許へ物頼みにやる文、心をつくべし。また、こと
わりの文は、とかく人の心を害ひぬべきものなれば、
つとめてなだらかに、やむを得ぬさまを細につらぬ
げにとりなづかるるやう認めんこそよけれ。

老いたる人に、今やうの生さかしき事いひ送ると、
その道の心得なからんあたりへ、我が知れるままに、
歌などよみこみてやるとは、共に無禮なり。若き男に
用あるをりの文、殊更に慎まざばあるべからず。

いひ續くれば、何がしくれがしの事いと多く、心が
くべき事さまざまあるべけれど、すべて、事のさまと

時とを思ひはかり、なほざりならざるやう書かまほ
しきわざなり。(樋口夏子)

三四、通信の今昔

平兼盛は天曆時代の歌人なり。嘗て東に下り、今の
磐城の白河に到りて、

平兼盛
是忠親王の曾孫、父篤行始めて平姓を賜はる。
あづま(東)
たよりあらばの歌
拾遺集別に出づ。

たよりあらば、いかで都へ告げやらむ、
けふ白河のせきは越えぬと。

契沖
俗姓は下河氏、國典に精しく、著書甚だ多し。

と詠じ、世人傳へて之を稱せり。近世の碩學契沖阿闍
梨、兼盛が歌の心を擴めて、更に旅の歌を作りて、

越えぬとて
の歌
漫吟集に出づ。

越えぬとて、都に告げしたよりだに、
といへり。

げにや、徳川幕府の時に至りても、京都と奥州との
間の飛脚便は、一年數回に過ぎず。偶、幸便に託すれば、
音信或は達し、或は達せず。契沖が「聞え聞えず」といへ
るはこれなり。古人が故郷を懐ひ、親族・朋友を戀ふる
ことの切なる、眞に察するに堪へたり。然れども、今や、
電信全國に通じ、夜白河に入るもの、直に一葉の頼信
紙を電信局に投ずれば、「ブジニツイタ」の報知、即夜京

都に至り、東西幾百里の人をして、忽に心安く夢穩ならしむ。

わが國、維新以後、頻りに西洋の事物を輸入し、電信の如きは、最もはやく東京に架設せられ、^{ひきつて}延いて地方に至れり。その頃、田舎の人、在京の子供に衣服を送るとて、包に荷札を附けて、電信線に懸け置きし話などありき。今は三尺の童兒も電信の書式を知り、商人はこれにより、坐ながらにして全國商品の相場を知り、一瞬の間に、千里の外と賣買の約定をなし、氣象臺はこれにより、全國日日の天候を豫報して、航海、農業等

における災害を減ず。

然れども、電信は符號を通ずる者にして、一語を送るにも相應の手續を要し、あまり長文の通信に便ならず。近頃電話の發明ありしより、複雑にして且つ長き談話も、その儘通ずることを得、長距離電話にては、數百里の遠きを隔つれども、その互に應答し得ること、對面して語るに異ならず。

又、最近の發明に無線電信といふものあり。この機械は電線を要せざる便利ありて、燈臺、軍艦、或は潮流急激なる海峡等に用ひらる。この發明によりて、海上

の危険救助に便益を得ること頗る多し。
今や通信機關の状態は實にかくの如し。これをい
かて都への昔日に比すれば、天地雲泥の相違と謂ふ
べし。文明の力もまた偉なるかな。(新保磐次の文による)

二年組 渡部スズ子

改訂高等女學讀本卷四終

大正六年度
大正五年 大正四年 大正三年 大正二年 大正元年
一月二十七日 一月二十三日 一月二十日 一月十七日 一月十三日
改訂再版發行 改訂再版發行 改訂再版發行 改訂再版發行 改訂再版發行

大正六年度
臨時定價
金參拾四錢

不許複製

改訂高等女學讀本
定價
卷一より各金參拾貳錢
卷四まで各金貳拾八錢
卷五より各金貳拾八錢
卷十まで各金貳拾八錢

著者 佐藤 球
著者 鹽井 正男
發行者 株式會社 明治書院
印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地
印刷所 取締役社長 三樹 一平
東京市京橋區西紺屋町廿七番地
東京市京橋區西紺屋町廿七番地
株式會社 秀英 舍

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話本局二四三八番

鉛本製本

